勤務医部会だより

「ヘリポートに纏わる記憶」

幹事　奥村　明彦

私の勤務する海南病院では、一昨年の３月から大規模な施設整備が始まっている。同一敷地内での建て替えであり、診療機能を維持し続けなければならないため、実際には、まず空いたスペースを作り、そこに医局や診察室などを移し、医局や診察室が引っ越して空いたスペースを壊して新しい建物を建てる、というように、パズル式に空いたスペースを利用していくやり方で、“Scrap and Build”方式と言われる建て替え方法である。施設整備が終わるのはまだ２年以上先のことであるが、先日、何気なく、完成後の新病院のイラストを見ていた際に、ふとヘリポートが目に付いた。使用頻度が低いと思われるヘリポートの建設のために、巨額の資金を投入するのはいかがなものかと、建築委員会でも相当揉めたことを思い出すと同時に、数年前のある患者さんのことが脳裏によみがえってきた。

その患者は、30歳代の新婚の女性であったが、重症の急性肝障害で当院に入院してきた。入院後数日目に、肝性脳症２度が出現し、その時点で劇症肝炎と診断した。最悪の場合は肝移植が必要になると予想していたため、すでにその数日前から名古屋大学の消化器内科と移植外科には相談してあったが、生体部分肝移植が可能な施設への転院に向けて、データのやり取り、家族への説明など、俄かに慌ただしくなった。折しも名古屋大学では生体部分肝移植と脳死肝移植が続いた直後であり、受け入れは難しいということになったため、急遽、他の受け入れ可能施設を探さなければならないことになった。名古屋大学移植外科のご尽力により、岡山大学が患者を受け入れてくれることになり、その日の昼ごろには、ヘリコプター（以下、ヘリ）で患者を岡山大学に移送する手はずが整った。主治医である私と、当時消化器内科をローテートしていた研修医のＳ先生の２名が患者に同行することとなり、着の身着のままで救急車に飛び乗って病院を出発した。病院にはヘリポートがなかったため、すぐ近くの木曽川河川敷にヘリコプターが到着することになっていた。河川敷まではほんの数分の距離であったが、既にそこには我々の予想していたものより大型の消防防災ヘリコプター（以下、防災ヘリ）が到着していた。岡山までは相当の距離があり、通常のドクターヘリでは対応できないため、小牧から防災ヘリで飛来していただいたのであった。患者を収容後、ヘリはただちに離陸し岡山へ向けてのフライトがスタートした。防災ヘリには、パイロットを含めて４名のクルーが搭乗しており、私とＳ先生、患者さんと患者さんのご主人の総勢８名でのフライトとなった。防災ヘリの中ではヘッドフォンを着用しなければならず、会話もままならない。幸い天候は問題なかったが、やはり揺れた。私にとってはヘリに搭乗すること自体が初めての経験であり、フライト中は患者の容体の変化にも注意を払わなければならず、極度の緊張状態の連続であった。離陸後約90分で岡山大学病院の屋上ヘリポートに接近し、ヘリは着陸のため徐々に高度を下げた。あと５メートルほどで着陸だ、やれやれ、と思った矢先に、“危ない！”とクルーの一人が叫んだ。雨風にさらされてボロボロになっていた吹き流しが、風圧でちぎれて舞い上がったのである。もしも吹き流しがローター（回転翼）に絡まったら一巻の終わりである。ヘリはアクション映画さながらに急旋回して再上昇し、吹き流しを回避した。この時はさすがにもうダメかと思い、恐怖で身も心も凍りついた。が、パイロットの落ち着いた操縦により２度目のアプローチで無事に着陸できた。迎えてくれた大学病院のスタッフに患者を引き渡し、そこでやっと我々も一息つくことができた。“帰りも小牧まで乗って帰られますか？”というご親切なお誘いを固辞したのは言うまでもない。気付いてみれば、白衣の下はＴシャツ１枚という出で立ちであったが、Ｓ先生と二人で新幹線で名古屋に戻った。今思い出しても、一人の患者を救うために、危険なお仕事を淡々とこなされている防災ヘリのクルーの方々の真摯な姿勢には、改めて感動する次第である。幸いその患者さんは現在はお元気にすごされている。

新しい病院のヘリポートにも、いつかヘリがやってくることがあるのだろうかと、イラストを見ながらなぜか感慨深い気持ちになった。

（愛知県厚生連海南病院）